
白ノ娘～弱音　ハク～

明日奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白ノ娘く弱音 ハク

【Nコード】

N0060K

【作者名】

明日奈

【あらすじ】

「生きていてごめんなさい」いつの間にか私の口癖。

緑の国の小さな村で一人だけ白い髪の人。同じ緑の国の小さな村でもっとも美しい、緑の髪の彼女。私達の物語は――

紙飛行機に引き続き、白の娘の物語化をしました。連載と言っても、第3部で終わります。

白の娘　　始まりの章

「きゃっ」

「目障りなんだよハク」

沢山の人々は私を上から見下ろす。心配しているのではない。
見くびるような形だ

「ごめんなさい・・・生きていて・・・ごめんなさい」

この言葉がいつのまにか私の口癖
ずっと弱音ばかり吐いていた

気が付けば皆が私の敵、友達も味方もない
楽しいことの無い、まったくつまらないの人生

ここは緑の国

その中の小さな小さな村

村の人たちは皆　きれいな緑の髪

なのに私だけが白い髪

皆とは違う白く、純白の白い髪

仲間外れの私

毎日のようにいじめられ、毎日のように言っていた言葉

生　キ　テ　イ　テ　ゴ　メ　ン　ナ　サ　イ

もう私に居場所なんてない。

どこに行っても髪の色で判断されていじめられる。

私はどこに行けばいいの？

私の居場所は人々が決して近づかない森の奥
そこに密かにそびえ立つ千年樹
まるで神の居るような木
私はここで一人 神に願いをかけた

「誰でもいいから私に友達をください」

私は分かった

一人で生きること・・・

孤独に生き続けることは、とても寂しい事
だれでもいいの

心から信頼できる私の友達になって
コレが私の願い

ある日、私の唯一の居場所……

千年樹のすぐ側で人が倒れていた

女の人らしい

私は、ほおって置けず彼女を助けた

彼女の名前はミクと言うらしい。

私達が仲良くなるのに時間はかからなかった
だけど私と彼女は

白い髪と緑の髪

身分の違い

何もかもが違った

しかも

村の中の誰より

綺麗で美しく長い緑色の髪

そして優しい声と笑顔

もちろん誰からも愛された

そんな愛されてる彼女は

どうしてこんな惨めな私にも優しくしてくれるの？

「ねえ…なんでミクは私に優しくするの？」

なぜ？

自分より劣る私を、憐れんでるの？

卑屈な私を優しく抱きしめて

彼女は私にこう言った

「あなたは誰より素敵な人よ。髪の色なんて関係ない。ハクはとて
も綺麗な心の持ち主よ」

なぜ、そんなことを言えるの？

私の頬を伝って熱いものがこぼれた

「私ミクみたいに優しくなりたい！」

「優しくなるにはね。誰にも許す心を持つ事だと思うの…だからハクも誰にでも許せる心を持つてね」

どんなに辛くても・・・

たとえ世界の全ての人が

私を軽蔑しても

必要としてくれる人がいる

ただ、それだけでとても幸せだった

＊。＋・＊・・＊。＋・＊・・＊。＋・＊・・＊。＋・＊・・＊。＋・＊・・＊。＋・＊・・＊

私達は二人で村を出て

賑やかな街で暮らし始めた

食料もお金も暮らすところも

自分たちで養った

どんな慣れない生活でも

私達二人なら大丈夫

どんな壁も乗り越えていける…そう思った

私達がお金を集める為に始めた仕事は

裕福な商人婦人の使用人

二人が生きたために選んだ道

＊。＋・＊・・＊。＋・＊・・＊。＋・＊・・＊。＋・＊・・＊。＋・＊・・＊。＋・＊・・＊

いつものように二人で仕事をしていた

ある日

屋敷で見かけた 青い髪の優しそうな男
あいつとミクの出会いが
私達の全てを狂わせた

優男は海の向こうにある青の国の王子
優男はミクを深く愛し
隣の国、黄色の国の王女の
結婚を断った

その理由が
「ミクを愛してるから」
王女は怒りに狂った

緑の国は戦火に包まれた
黄色の王女が下した命令
「緑の髪の女は全て、幼い子でも殺しなさい！」
王女はそう言って国を襲ったらしい

村は瓦礫の山……その下で倒れて動かなくなった人や道端で血を流
している人
みんなみんな死んでしまった
白い髪の私以外が
ミクの代わりに私が死ねばよかったのに

どうしてミクが死んでしまったの？

もう私をいじめた人は——ここ（この世）には居ない。

そして……私を絶望から救ってくれたミクも——ここ（この世）に居ない。帰ってこない

私はまた一人なの？
お願い私を一人にしないで……
私の側にずっと居て

白の娘　　〈最後の章〉

「生きていてごめんなさい」

この言葉がいつのまにか私の口癖

ずっと弱音ばかり吐いていた

楽しいことの無い、まったくつまらないの人生

ミクは死んだ…昔のようにつまらない…

港町の教会で、また新しい暮らし始めた

黄色の国の民衆達が王女を殺したと、風の噂で私の耳に届いた

いつものように、教会の木の下で人が倒れていた

ミクと同じだ…前もミクとこんな感じで出会ったな…

だが、今回は緑の髪ではなく、黄色い髪の少女

倒れていた彼女　助けたのが始まり

いつのまにか彼女と私は、とても仲良くなった

ミクと同じように出会って、同じように仲良くなった

だけど私と彼女　何もかもが、ミクと同じように違った

前向きでとても明るい彼女と

生きか死の境でさ迷ってる、根暗な私

ある日

誰もいない夜の懺悔室で
偶然聞いてしまった彼女の言葉

「私が犯した過ちで民衆達は怒り、王女である私を殺そうとしました。私の双子の弟のおかげで生きています。でも、私の罪は消えませんが。どうか私を許して……」

ああ なんていうことでしょう
彼女は噂の

あ く の む す め

次の日の夜彼女は、街はずれの小さな港に居た
一人たたずむ彼女――…

背後から密かに近づき、懷ふとこからナイフ取り出して…

貴方は私の大切なミクを殺した。

自分の都合で気に入らない人々と平気で殺し、のうのうと生きてい
る。

何の罪もない、優しくて綺麗なミクを殺して…

その罪を償いなさい――王女リン！

王女かのじよの背中に向けてナイフを振り上げた

『どうか私を許して…』

ごめんなさい：

私ミクに謝らなければいけないことがあるの
貴方を殺した人を殺せなかった
貴方の仇をとれなかった

かのじよ
王女は昔の私

とてもとても悲しい人

ひとりで生き続けること

それはとても寂しい事なの……

だから、私は王女かのじよとこれからも生きる：

でも、もしここにミクが居たら

『優しくなるのはね。誰にも許す心を持つ事だと思うの……だからハクも誰にでも許せる心を持ってね』

誰にでも許せる心……

そう言っていたから、許すよね……？

『

天国にいるミクへ

お久しぶりミク

貴方を殺してしまった王女と私は楽しく生きてるよ。

なにもできなかった彼女は
少し料理がうまくなったの
今日のおやつブリオッシュは彼女が作ってくれて
とってもうまく焼けてるの

また私達が会えるときは楽しく話そうね？

ハクより

└

私は時々思う――

あの時：私が王女かのじよと殺そうとしたあの海辺で

一瞬だけ見えた幻覚

王女かのじよにとてもよく似たあの少年は

いったい誰だったのかしら――――――？

白の娘 最後の章（後書き）

これで白ノ娘の物語は終わりです。。。意味が分からない？

なにこの話？

って思った人はすぐにクレームを！！（しないでね？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0060k/>

白ノ娘～弱音 ハク～

2011年8月24日01時15分発行